

玄奘三蔵とパミール

酒井敏明

2009年4月18日

目次

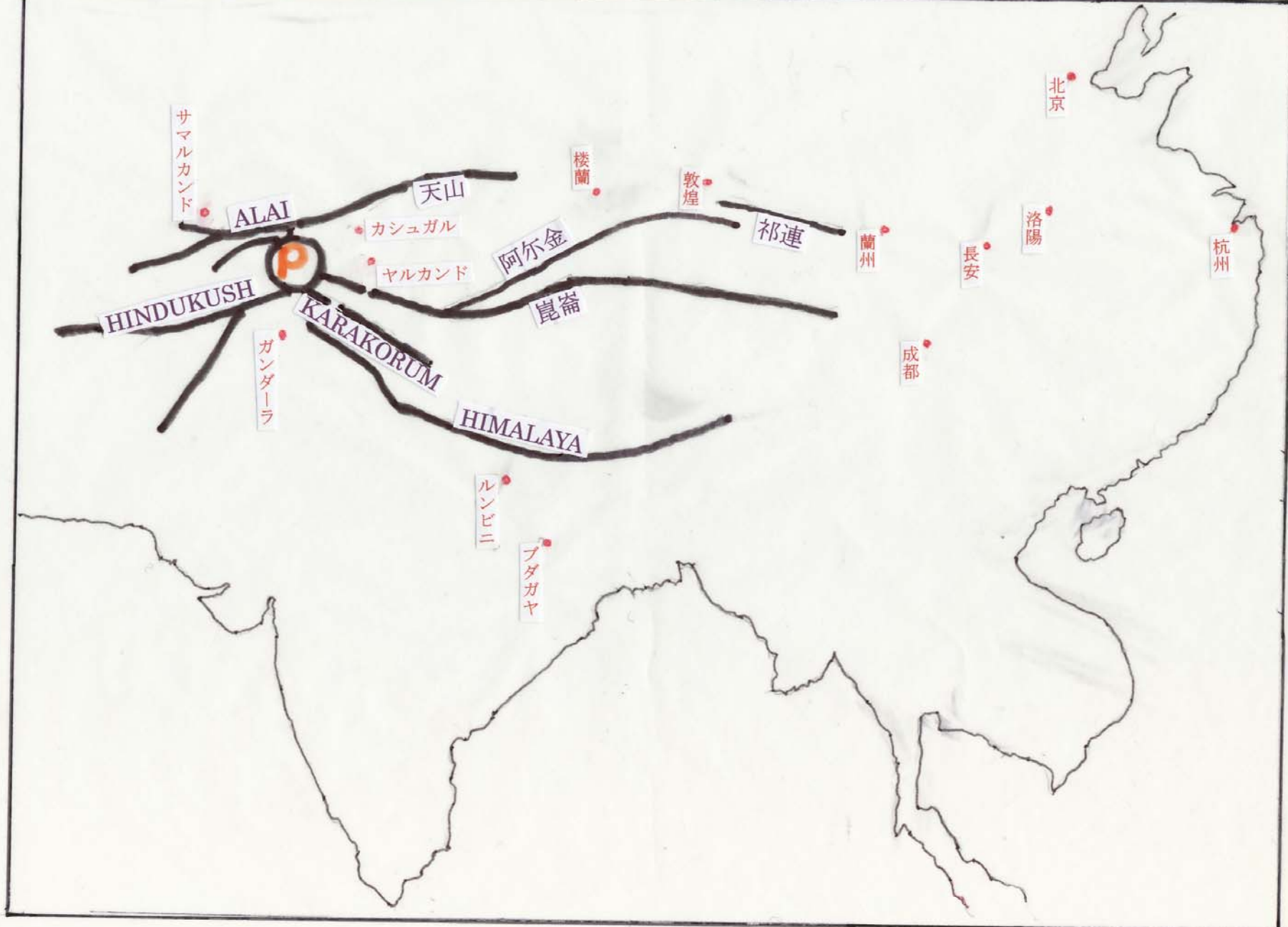
§ 1 渡印求法の中国僧

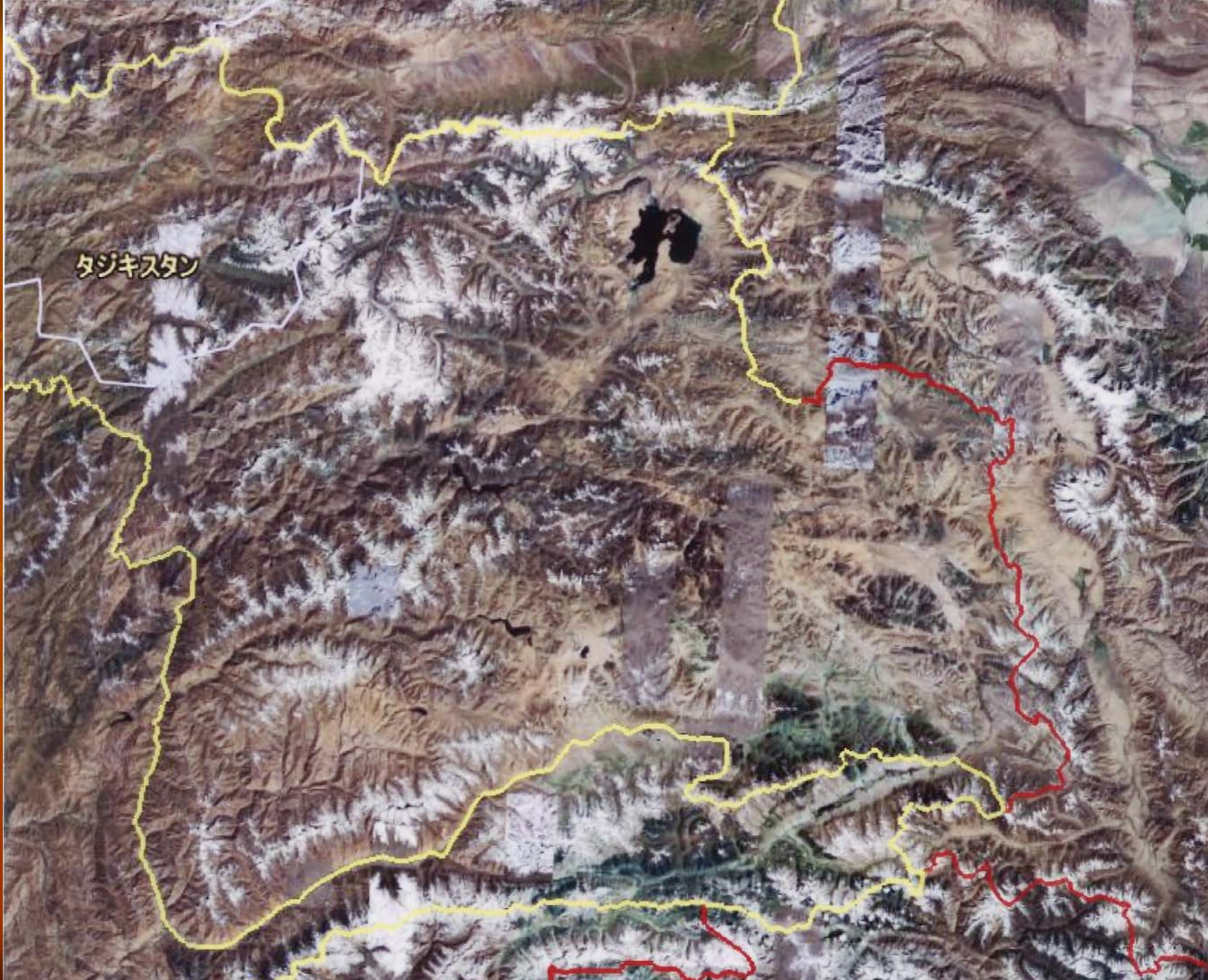
§ 2 玄奘三蔵の生涯

§ 3 パミール

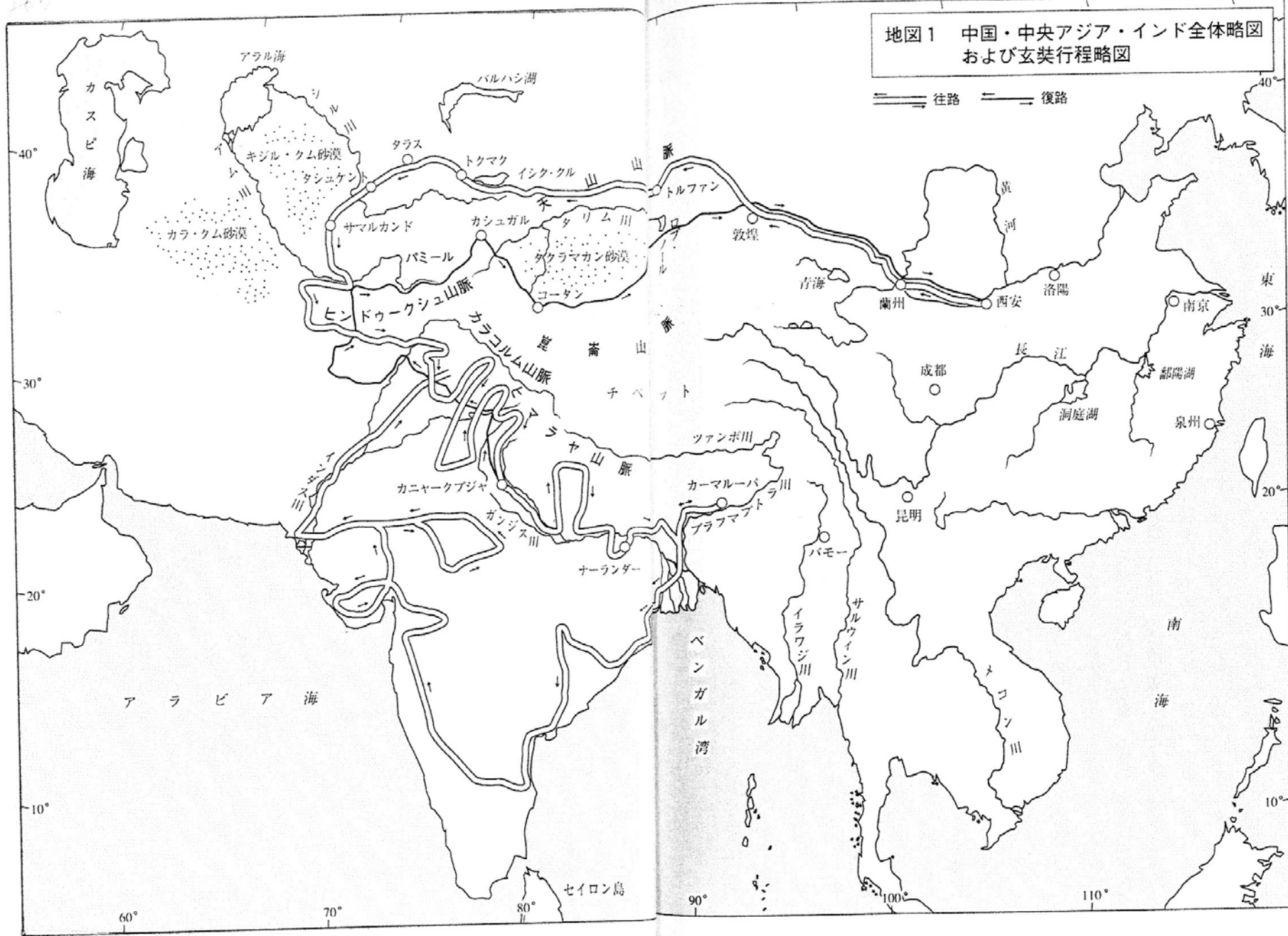
§ 4 ワハーン通廊







地図1 中国・中央アジア・インド全体略図
および玄奘行程略図



§ 1 渡印求法の中国僧

「東漢末以後に於ける入竺求法の僧侶は千を以て数ふべく、
一々枚挙するに暇あらず」(桑原隲藏「入竺求法の僧侶」1908)

南道、北道、吐蕃泥波羅道の3ルート

- a 崑崙山の北麓に沿い西進、ホータン、ヤルカンドを経、葱嶺を越えてインダス河上流に沿い北インドに入るもの
- b 天山の麓に沿い、クチャ、アクスを経、氷嶺にて天山を横切り、天山北路より中央アジアを経て北インドに入るもの
- c 黄河の上流西海の側を過ぎ、チベット、ネパールを経、中インドに出るもの

初唐の渡天竺僧65人の分析

(長澤和俊「『大唐西域求法高僧伝』小考」1976)

往路に利用したルート

a 西域路	14人
b 吐蕃道	8人
c 南海路	41人
d 経路不明	2人

A インドまたはセイロンに到達しなかった者	23人
途中で死亡した者	12人
シュリビジャヤ(スマトラ)に滞留した者	2人
行方不明	2人
途中から帰国	7人

B 目的地に到達した者 41人

目的地に到達した者のその後

インドであるいは帰途に死亡した者	18人
無事帰国した者	5人
行方不明の者	11人
彼地に滞留したもの	7人

帰路に利用したルート

途中に死亡したものを含め帰路が判明する者
24人

a 西域路 9人

b 吐蕃路 5人

c 南海路 10人

§ 2 玄奘三蔵の生涯

- 玄奘(602頃～664) 河南省陳留の人 兄を頼って洛陽に出、13歳で得度。四川省成都などで修行を積み、23歳で国都長安に移った。
- 仏教教理を研究するため天竺に渡る悲願を立て同志の数僧とともに唐朝に願い出るが許されず、ついに国禁を犯して単身インドに向かう決意をかためる。
- 貞観3年(629)秋ひそかに長安を出発しインドへ。
- インド滞在十有余年ののち、陸路中国に向かい、ホータンから帰国の勅許をあおぎ、貞観19年(645)正月長安に帰った。
- 太宗の許しを得て、将来した經典類の翻訳事業にあたり、『大唐西域記』を編纂した。麟徳元年(664)2月没。

前嶋信次著

玄奘三藏

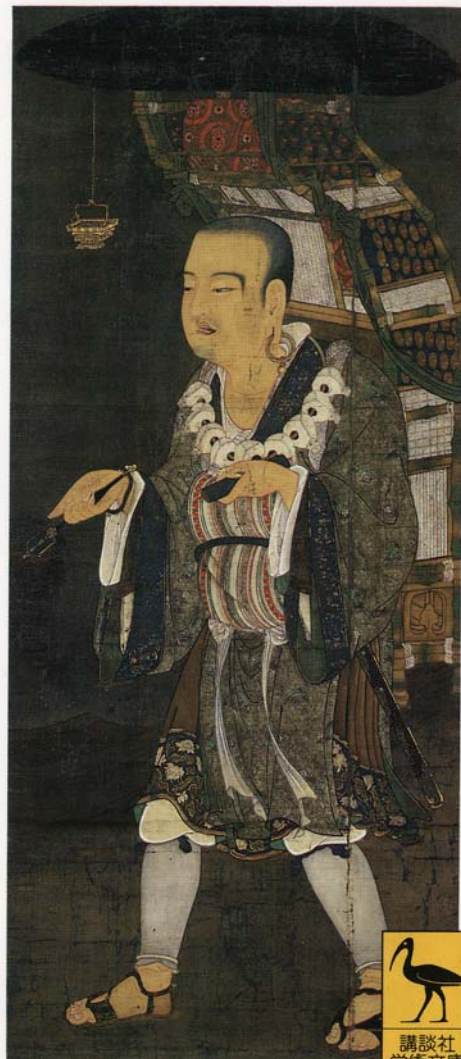
—史實西遊記—



岩波新書

105

玄奘三蔵 (げんじょうさんぞう)
西域・インド紀行
慧立 えりゆう 彦悰 げんそう
長澤和俊 訳



講談社
学術文庫

中野美代子

三藏法師

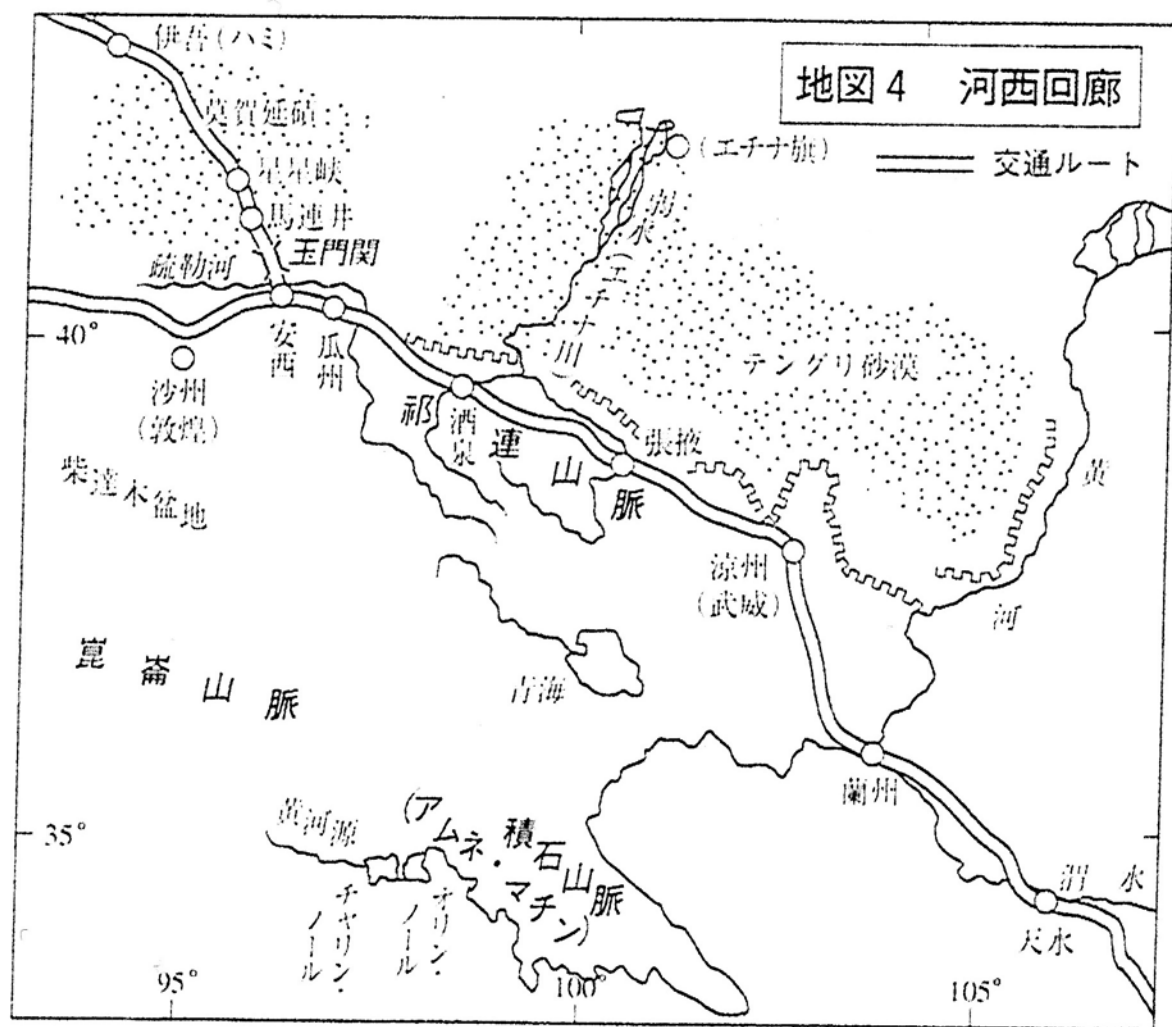
中公文庫

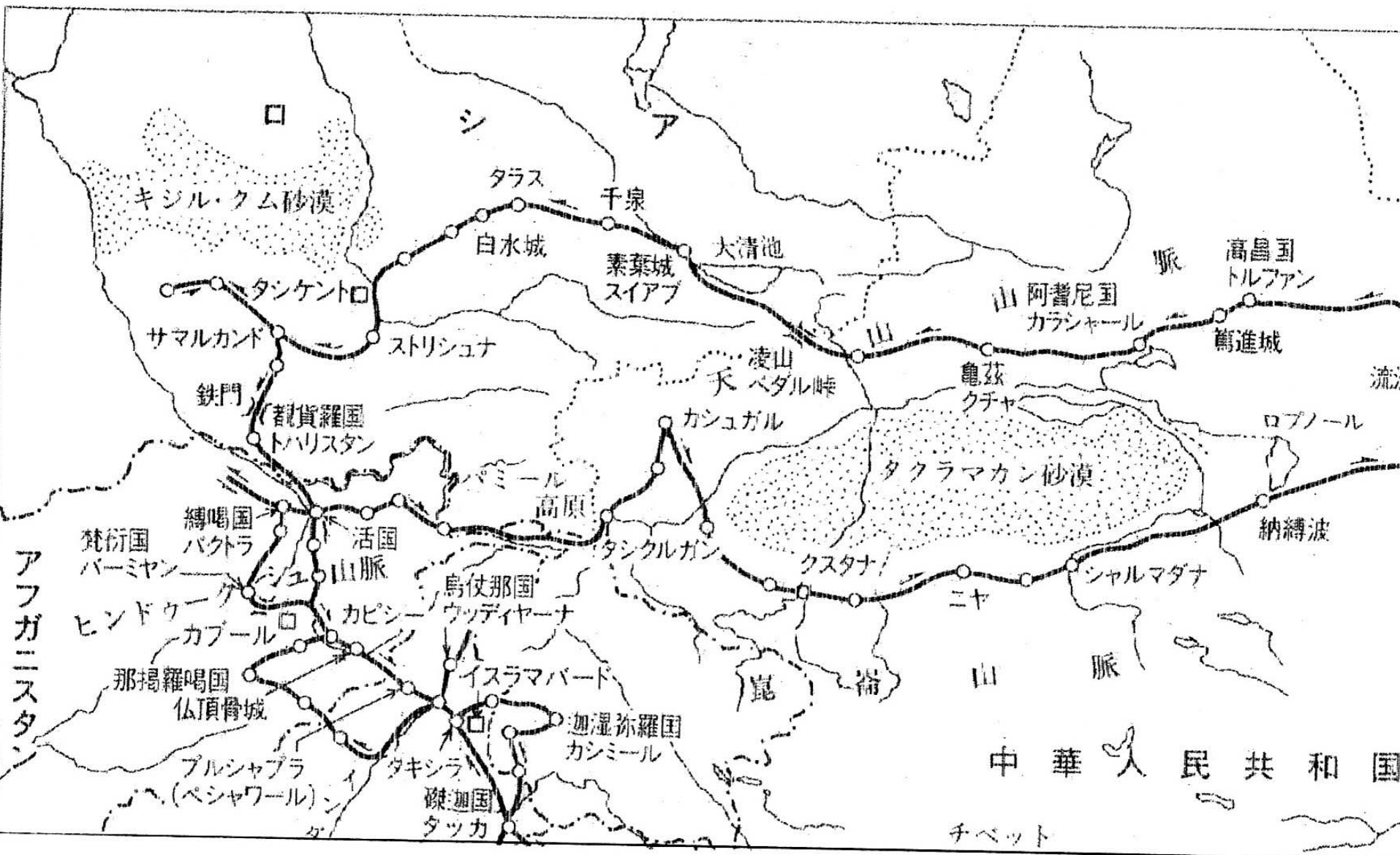




天山北路から中央アジアへ

- 秋9月長安を出発。蘭州で黄河を渡し、祁連山脈北麓をゆく河西回廊を通った。
- 高昌国王の厚遇と庇護を受ける。
- 天山南路の屈支国(クチャ)、跋禄迦国(アクス)を過ぎ、天山山脈を凌山(峠)で北へ越え清池(イシク湖)の岸に到る。
- イリ河上流域、シルダリア上流域を西へ進む。
- 西突厥の葉護可汗に会い庇護される。
- トルキスタン低地を南へ下がり、縛葛河(アムダリア)を渡って現在のアフガニスタン北部低地にいたった。





五天竺を巡歴

- 大雪山(ヒンドークシュ)を越え、梵衍那国(バーミアン)を訪れたのち、出発後2年にして北西インドのガンダーラ地方に入った。
- カシュミール国王都シュリーナガルに2年間滞在。
- ガンガ中流域各地を巡歴 ルンビニ(誕生の地)、クシナーラー(入滅の地)、ベナレス鹿野苑(最初の説法の地)、ブダガヤー(成道の地)
- 仏教の聖地マガダ国に到着した。王舎城のナーランダ寺を中心として研究した。

ペルシャ



前嶋信次『玄奘三藏』

- ナーランダー寺に5年間滞在、仏法研究に精進。
- のち数年を費やして東天竺、南天竺、西天竺の各地を訪れ、ガンガ中流域曲女城(カナウジ)にもどった。
- 641年秋、帰国の途につく。
- 経典類など荷物があり、有利な海路をとることを勧められたが、高昌国王との約束を守るため陸路に決定した。



§ 3 パミール

Pai-i-mir <foot of mountain> 山の麓の意

「氷河が形成した高峻な山地の谷 その溝渠が氷河作用による岩屑と沖積土に充たされている谷」

東西、南北ともに約350km、海拔約4000mの大山岳地域に八つのパミールがある。全体はThe Pamirs

1.Taghdumbash Pamir

2.Pamir-i-Wakhan

3.Pamir-i-Khurd

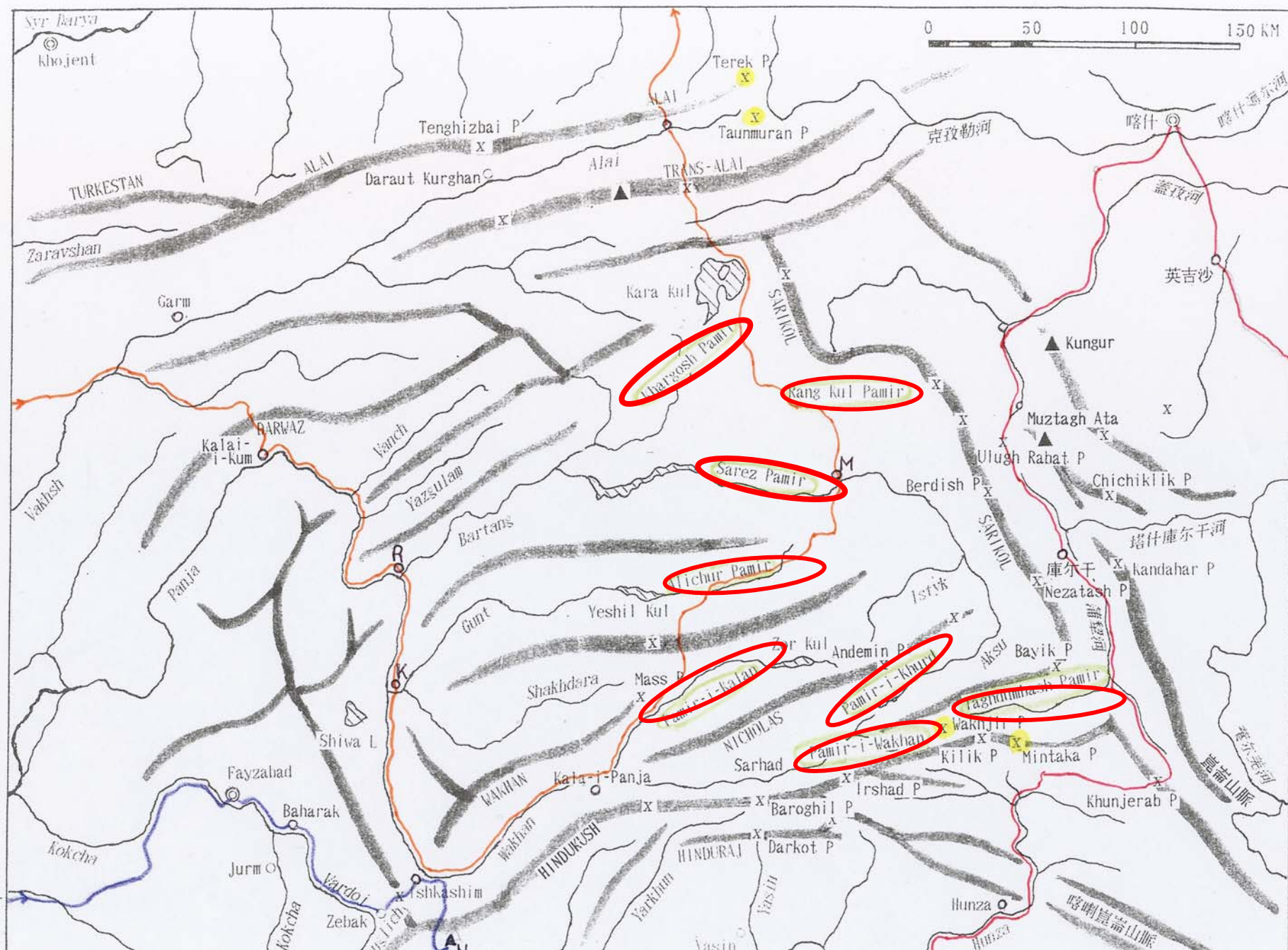
4.Pamir-i-Kalan

5.Alichur Pamir

6.Sarez Pamir

7.Rang Kul Pamir

8.Khargosh Pamir



パミールとその周辺



パミールをめぐる5本の幹線

1)テレック峠3874越え タリム盆地とフェルガナを結ぶ

カシュガル・オシュ 約400km 12日行程

2)タウンムラン峠3416越え タリムとトゥラン低地を結ぶ

カシュガル・ドウシャンベ間 約800km 30日行程

3)ワフジル峠4827越え タリムとトゥラン低地をむすぶ

ヤルカンド・カライパンジャ間 約630km 20日行程

4)ミンタカ峠4709越え タリム盆地とインドを結ぶ

ヤルカンド・ギルギット間 約610km 24日行程

5)カラコルム峠5568越え タリム盆地とインドを結ぶ

ヤルカンド・レー間 約1000km 30日行程

Taghdumbash Par



Nanga Parbat北面



フンジェラブ 峠



タシュクルガン城址



Muztagh Ata 7546m



Kungur 7719m





Khumbob河とPani河の合流点



Panj溪谷からNoshaq山群を望む











Sasyk Kul 3820m Alichur Pa





パミールとその周辺





Bazaar in Murghab 3630m





Akbaital Pass 4655m



Kara Kul 3923m 365km²



Pik Lenin 7134m





ASIA

HOTEL ASIA













Tashkent, Uzbekistan



文化宮殿

Khudzhand



Ismail Somoni像 Dushanbe、Tajikistan



水量豊かなSyr Daria、Khudzhand西方

エイティガール・モスク



じゅうたん工場 Kashgar



樹陰でくだものを売る

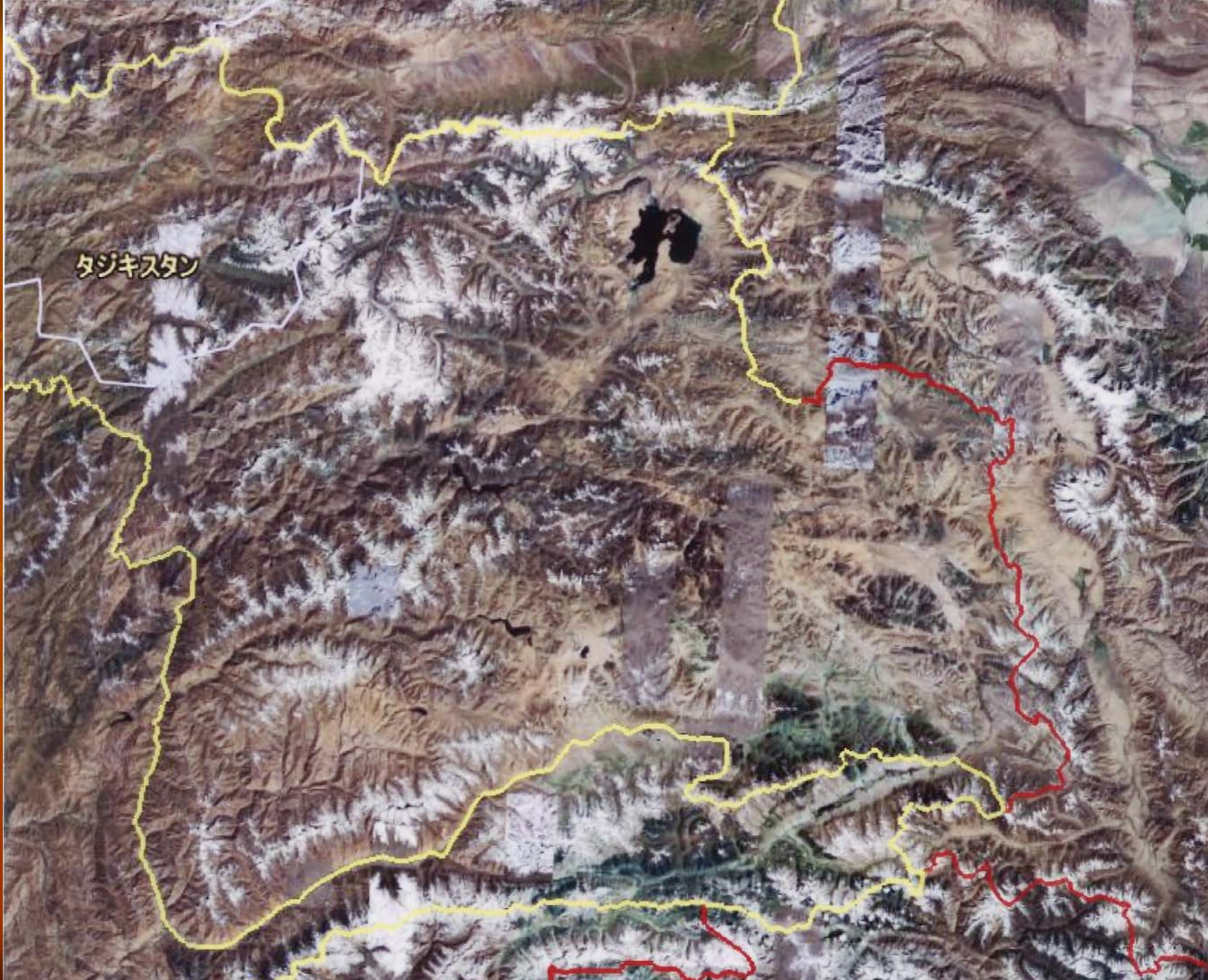


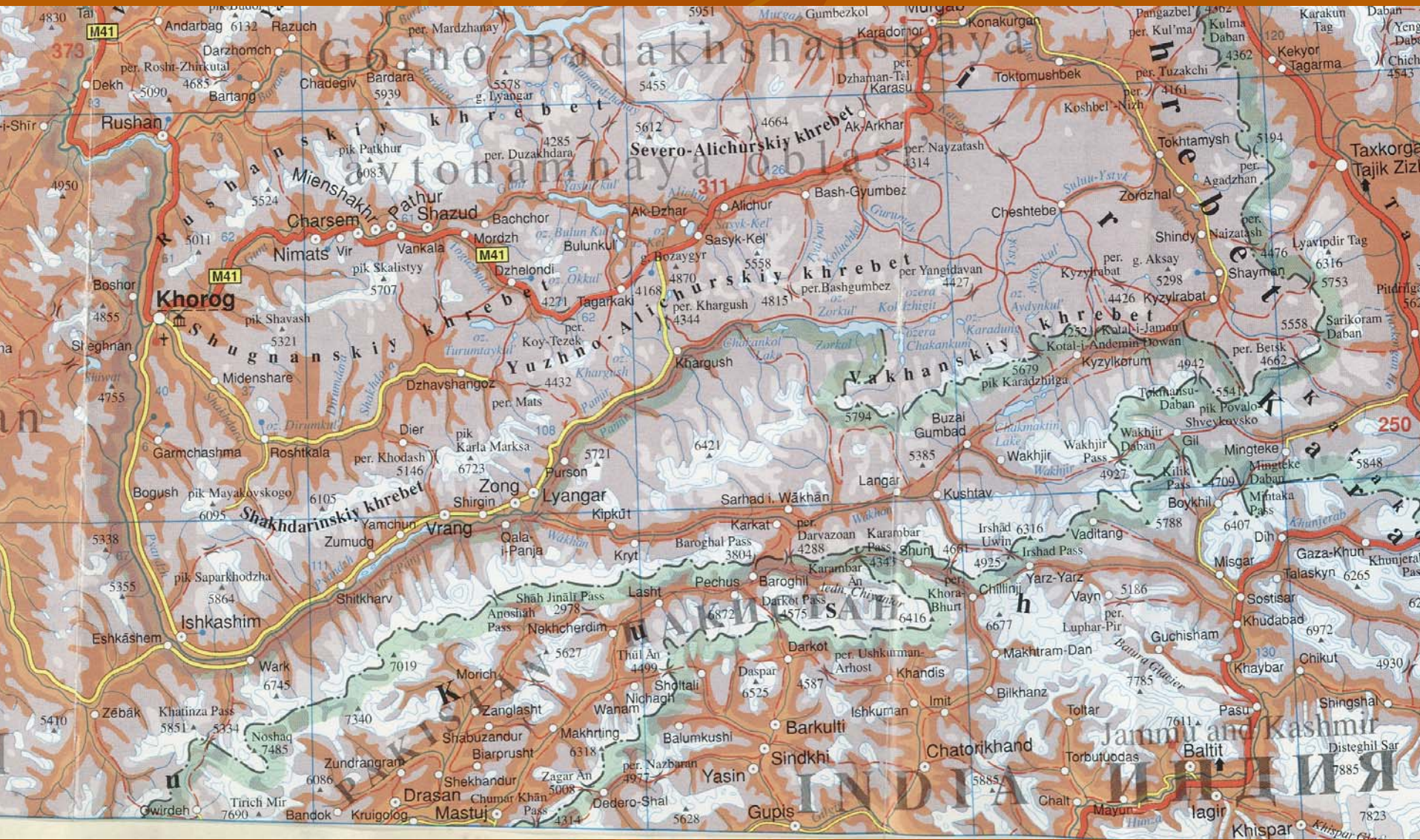
§ 4 ワハーン通廊

パミール山地南縁を限るワハーン通廊

オアシス道の大幹線のひとつ

使節・商人・僧侶・軍隊が往来した

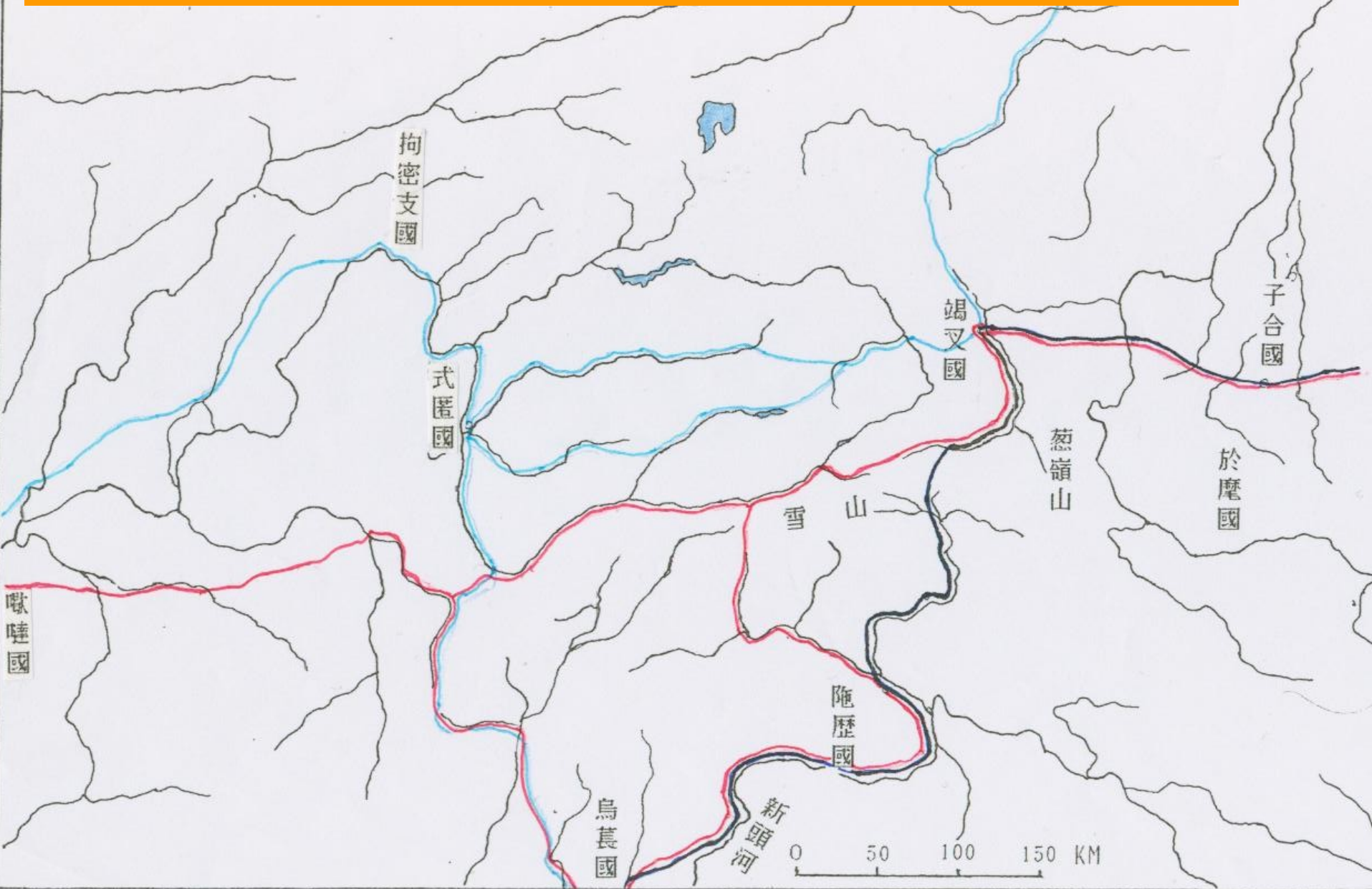




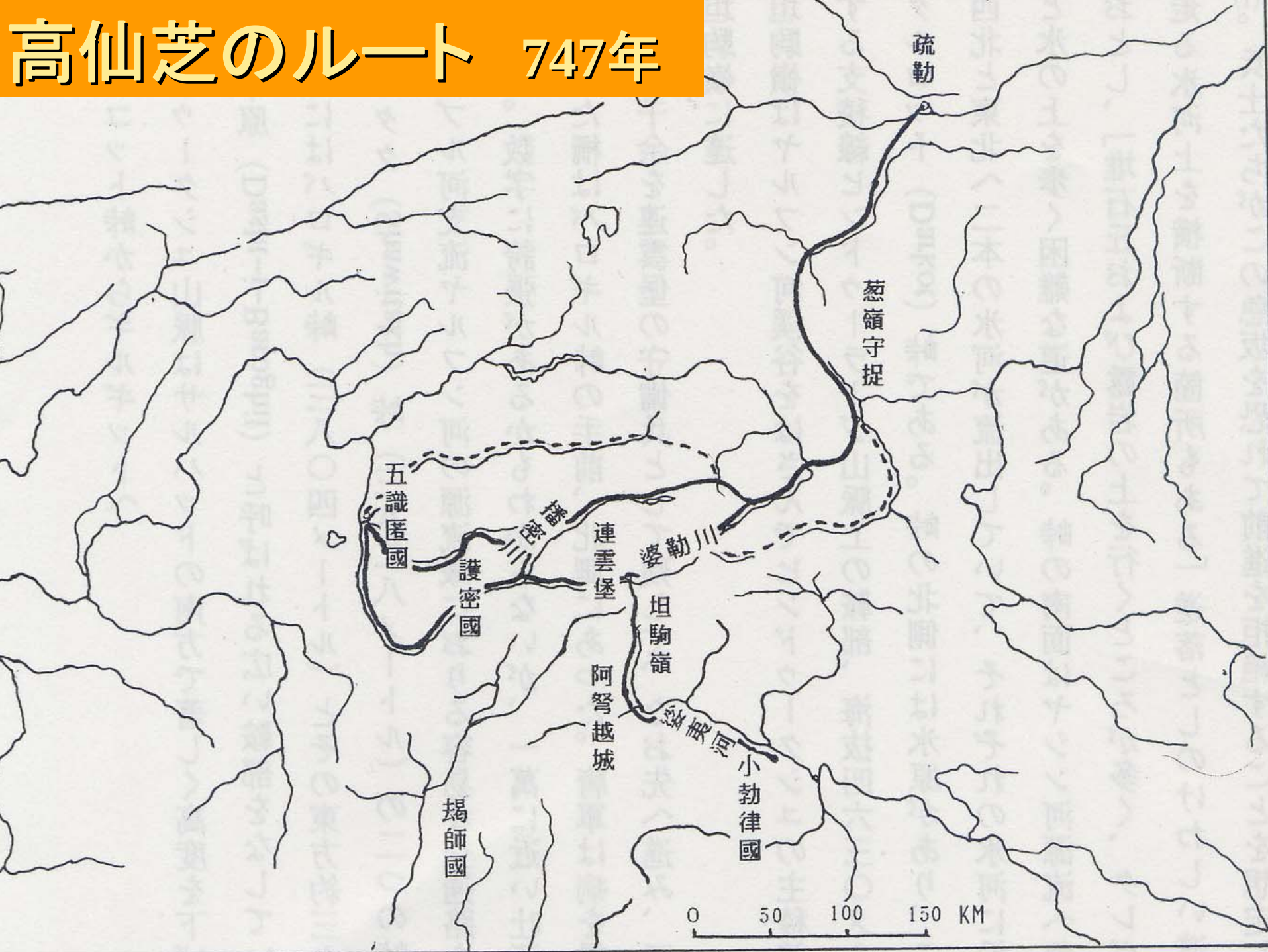
足跡を残したおもな先達

張騫	前漢 使節	126BC
法顕	東晋 僧侶	397
宋雲と恵生	後魏 使節・僧侶	519
玄奘	唐 僧侶	643
悟空	唐 僧侶	751、780
高仙芝	唐 将軍	747
マルコ・ポーロ	ヴェネツィア商人	1273
De・Goes	ポルトガル人 イエズス会士	1603

法顯 397 宋雲と惠生 519 悟空 751,780



高仙芝のルート 747年

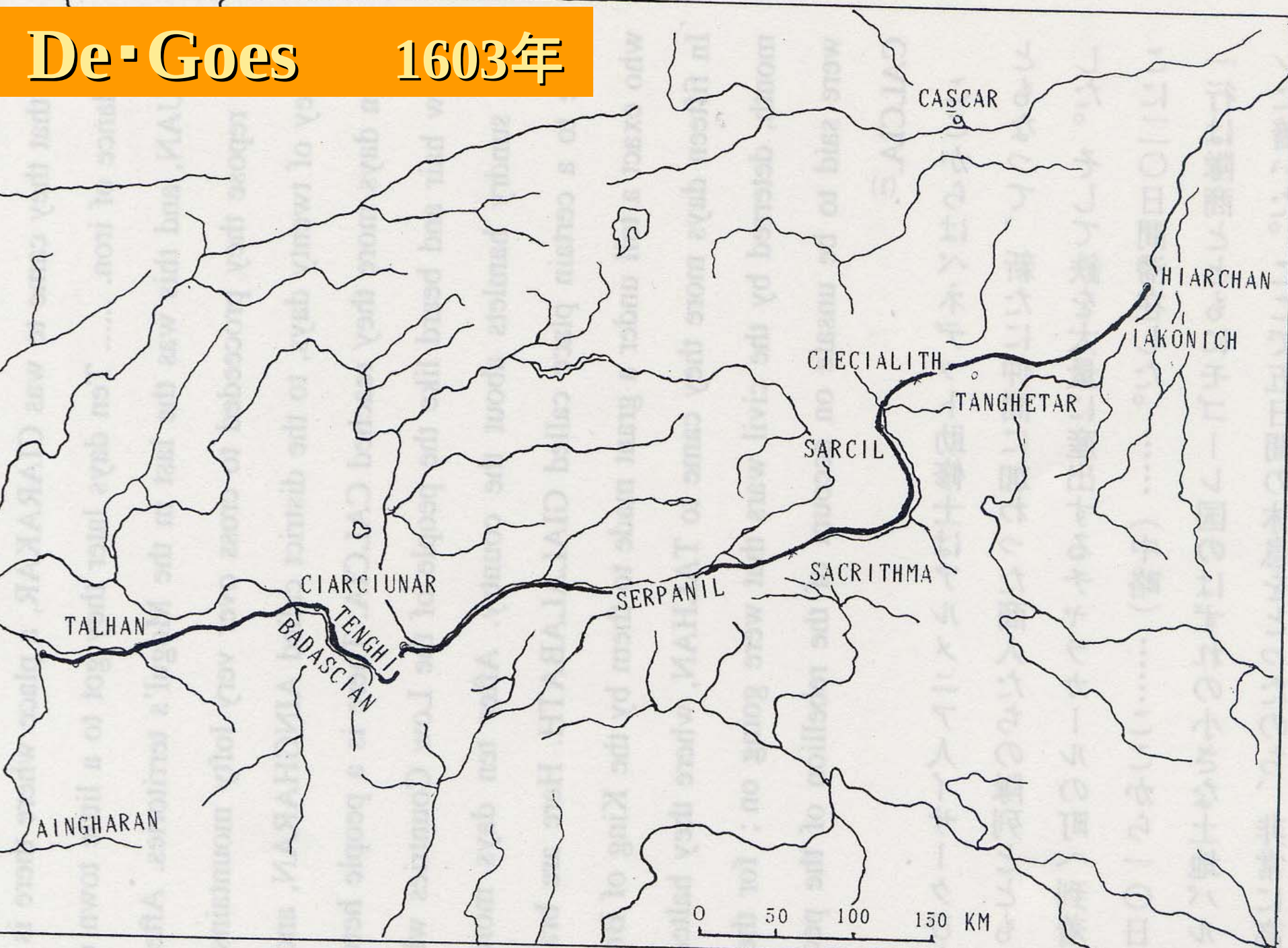


マルコ・ポーロ c1273年



De·Goes

1603年



玄奘が復路に訪れた土地

呾叉始羅国

タキシラ

伐刺拏国

バンヌ

迦畢試国

チャリカール東方

安怛羅縛婆国

アンダラーブ川溪谷

闍悉多国

コスト川上流域

活国

クンドゥーズ地方

Khawak峠またはSalang峠によって
ヒンドーク シュ山脈を越えた？

鉢鐸創那国

周囲は2千余里ある。国の大都城は山の崖の上に位置して、周囲6、7里ある。山や川が連なり、砂や石がいっぱいである。土地は菽や麦に適し、葡萄、胡桃、梨、柰等の果実が多い。気候は寒さ烈しく、人の性質は剛勇である。俗として礼儀作法もなく、学芸も心得ない。その顔貌は卑しく、氈・褐をきるものが多い。伽藍は3、4カ所、僧徒は少ない。王は性質純朴で、深く三宝を信じている。

達摩悉鉄帝国

二つの山の間にあり、東西千五、六百余里、南北の広さは四、五里で狭い所は一里を越えない。縛葛河に臨み、曲がりくねっている。小高い丘が或いは高く或いは低く、砂や石が一面である。寒風は凄まじく、ただ麦や豆だけを植えている。樹林は少なく、花果に乏しい。多く両馬を産する。馬の形は小さいけれども、山地を馳渉するに耐える。人々の間には礼儀なく、人の性質は乱暴である。姿形は卑しく、衣服は氎や褐である。眼は碧緑である点が諸国に異なっている。伽藍は十余カ所、僧徒は少ない。

昏駄多城は国の都である。中に伽藍がある。この国の先王が建てたもので、崖を掘り谷を鎮めて堂宇を建てた。この国の昔、まだ仏教が流布しない時にはただ邪神に奉事していた。・・・

伽藍の大精舎の中に石の仏像がある。像の上には金銅の円蓋をつるし、たくさんの宝で荘厳してある。人がその仏像の周囲を旋繞するとこの円蓋もそれにつれて廻り、人が止まると円蓋も止まる。・・・

波謎羅川

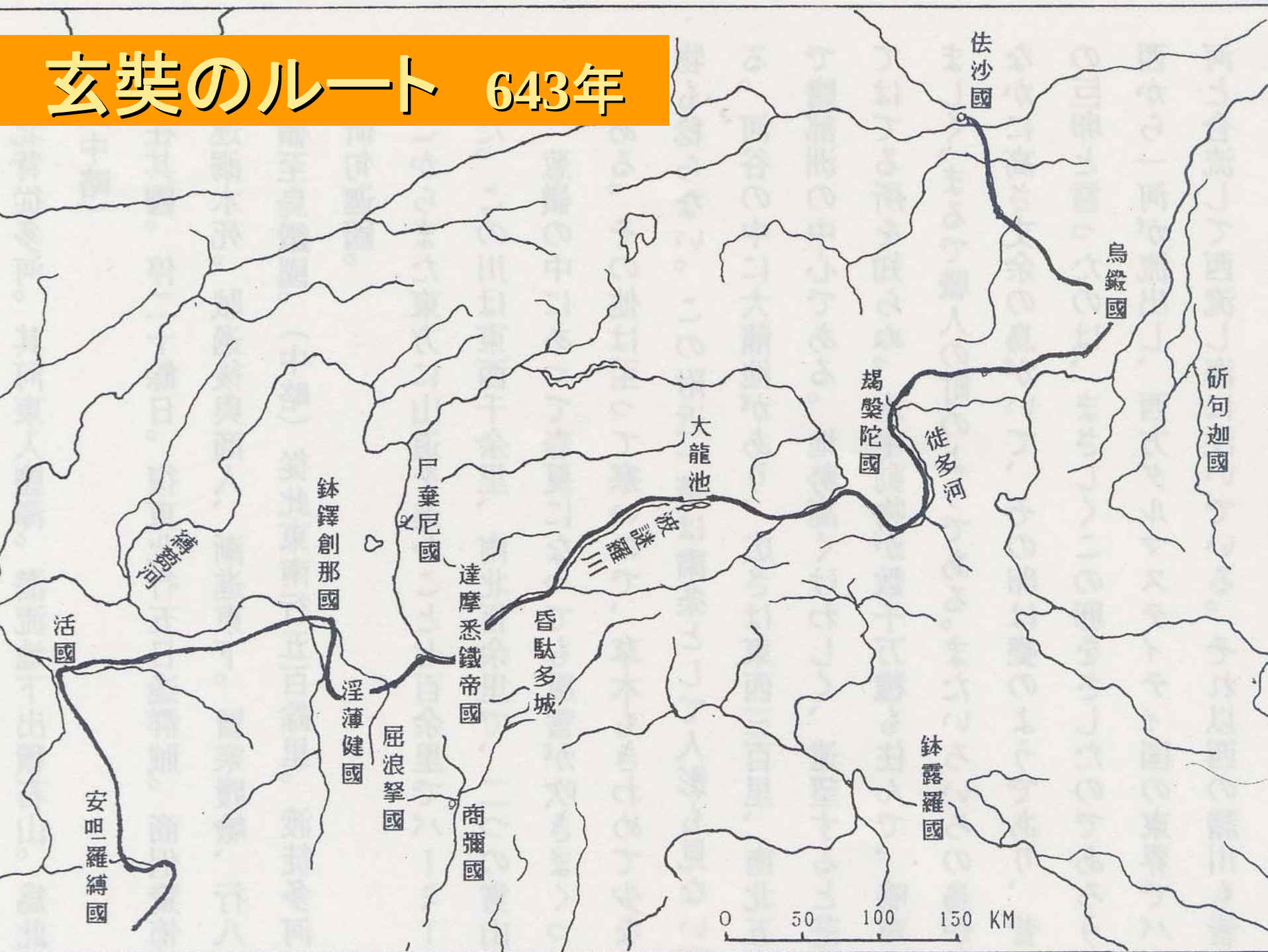
(商弥国の)国境より東北へ山を越え谷を渡り、危険な道を通って行くこと七百余里で、波謎羅川に至る。東西千余里、南北百余里。狭隘な所は十里を越えない。二つの雪山の間に位置しているので寒風は凄じく、春夏も雪を飛ばし、昼夜も風を吹きつのらしている。土地は塩分を含み石ころ多く、種を植えてもならず、草木も稀である。それ故、荒れはてて住みつく人とても全くない。

波謎羅川の中に大きな竜池がある。東西三百余里、南北五十余里、大葱嶺の中に位置し、瞻部洲の中でその土地は最も高い。水は清澄なること鏡の如く、その深さは測り知れない。色は浅黒く、味は甚だ甘美である。...

葛盤陀国

周圀二千余里ある。国の大都城は大きな岩山に基礎を置き、徙多河を背にしており、周圀二十余里ある。山々が連なり、川原は狭隘で、穀作は僅かで、菽・麦が豊富である。樹木は稀で、花・果は少ない。丘も野も荒れはて、城や村も住民は少ない。俗として礼儀なく、人々には学芸も乏しい。性質は荒々しく、武力の点でも驍勇である。容貌は醜く、氈や褐を身に着けている。文字・言語はおおむね佉沙国と同じである。さりながら信仰は心得て、仏法を尊崇している。伽藍は十余カ所、僧徒は五百余人、小乗教の説一切有部を学習している。

玄奘のルート 643年



Camp 2からNoshaqを見上げる





Tirich Mir 7706m



Shiva高原の牧地



Shiva湖 3110m

おわり